

日本「アジア英語」学会 ニューズレター

JAF AE NEWSLETTER No.10 (January 2002)

10回全国大会、金沢経済大学で開催

日時：2002年12月1日(土)
10:00~18:05

第10回全国大会プログラム

大会総合司会：津田早苗（東海学園大学）

10:00 開会の辞：河原俊昭（金沢経済大学）

会長挨拶：本名信行（青山学院大学）

10:10-11:40 特別講演：

“English in Contact with Philippine Languages:
Taglish and Philippine English”

Dr. Maria Lourdes S. Bautista
(De La Salle University)

11:40-12:00 会員総会

12:00-13:30 昼食休憩

13:30-15:50 研究発表

司会：大島眞（実践女子大学）

1. 「台湾国民小学の『英語教育』準備期における教
育機関の連携～台湾・台北市の事例から大学教育機
関の役割を探る～」

相川真佐夫（和歌山信愛女子短期大学）

2. “International Understanding at Elementary
Schools in Japan: A Bilingual Project Involving
University Students”

Jie Shi（国際基督教大学）

3. “Issues of native vs. non-native teachers of
English”

Rebecca Reagan and Atsuko Watanabe
(国際基督教大学)

(14:45~15:00 休憩)

4. 「Guam の人々の Identity—『英語』の下での
抗争」

萬戸克憲（桃山学院大学）

5. 「英語教師フィリピンスタディツアーの成果と
課題」

浅川和也（東海学園大学）

(15:50~16:05 休憩)

16:05-18:05 シンポジウム

テーマ：「日本の大学における英語教育の方向付
け：中京大学国際英語学部の挑戦」

司会：吉川寛（中京大学）

発題：「アジア地域研究、異文化理解の視座からの
英語教育」

奥村みさ（南山大学）

「国際英語学部の理念と目標」

福吉瑛子（中京大学）

「英語母語話者から見たアジア英語変種と海外大学
交換講座」

James F. D'Angelo（中京大学）

「日本の英語教育における今後の課題」

吉川寛（中京大学）

「シンガポール研修と Graded readers について」

Richard Morrison（中京大学）

閉会の辞：末延峯生（神戸商科大学）

19:00 懇親会（シティモンドホテル）

大会をふりかえって

末延峯生（神戸商科大学）

今回はフィリピン英語特集とあっていい。午前の
講演者はDe La Salle UniversityのDr. Maria Bautista。突
っぱしから、「比人は貧困である、しかも非識字率
は30%」といわれた時は、正直、気の毒だと思った。
しかし、続いて、英会話力56%、聞く力74%、読む
力73%、書く力59%と言われたときには耳を疑った。
気の毒な国は日本ではないか。

本名会長の仮説を証明する文例が次々と示される。
バベルの塔の再建かと驚くような独得の単語、言
いまわし、語順、それらが不思議にもよく分る。感心

させられる。語順は、どれほど順序がバラバラになっても、人間にはきれいにならべかえて理解する能力を持っていることがまざまざとわかる。この力こそユニバーサルなものだと思う。最後のAs far as being intelligible and acceptable are concerned, no more guilty, no more shame. We have colonized English.には、力がこもっていた。

次に相川氏が、台湾国民小学の英語教育準備のために大学教育機関が行って来た事業を紹介。今年から台湾全土で5年生から英語が必修となり、採用認証試験合格者を対象に研修を実施。教師に一年間の研修を義務づけ、また、大学教員の訪問団が小学を視察。日本への示唆に富む。続いてJie Shi氏。ICUの実習生と都内の小学生が連携し、互いに学び合う。毎回ながら文部科学省の官僚的目が届かないところを突く。渡辺あつ子氏はNativeとNon-native教師との違いについて。まず定義が必要だろうが、学習者の能力、教える側の熱意、教える内容が大きく関与する。私は、Nativeとは母語しかできない人と定義している。苦勞のない人が多いから。

次に萬戸氏が、母語であるChamorroを取り上げられたグアム人の悲惨な歴史を紹介。いやおうなく入って来る米語に対し、Guamの文化に根ざしたグアム英語に誇りをと提唱。浅川氏は日比の英語教師の交流について。日本人教師は比人の何としても英語を使う態度を学んだという。英米で劣等感を満杯にして帰国するより、むしろアジアで英語を学び、自信をつけるというプラス思考的発想。明るくていい。

最後にシンポジウム。吉川氏を中心とする中京大の国際英語学部取り組み。来年4月より実施にこぎつけた。中でも奥村氏は「日本人の交渉の相手はアジア人」と指摘。D'Angelo氏は“Ask us in 4 years.”と宣言した。英文学者の福吉氏は、田嶋ティナ氏の「あなたに役に立つ英語でいいのでは？」のことばに学生達と共に感銘を受け、EAL (English as an Asian Language) を提唱。「自分達は世界の中で歴史的なことをやっていることを実感する」と言われたが、同感。いまだに、むやみに白人文明にあこがれるのは日本の英語教師ぐらいではないかとさえ思う。学生たちの意識はそんな幼稚なものではない。R. Morrison氏は、学生への信頼と愛情で一杯の先生。日本の教授たちは“Happy to be a professor, but unhappy to be a school teacher”といわれたのが印象的。吉川氏は、国際英語の教育目標について。大いなる意欲に感動。今後、ことばの本質、Intelligibility、言語心理学、ことばのパワーが人間性を抹殺する現状から見た言語の力関係などのより深い研究の必要性が問われよう。それにしてもニホン英語の現実を認めないのはなぜか。では今使っているニホン英語はいったい何なのか、生んだ覚えはないと逃げられるものではない。また、「アジア英語の変種がやが

て互いの隔たりが大きくなり、共通語としての長所を捨てることになるかも」とも指摘。プレーキも大切だがそれを恐れることの方が問題。中でも西洋の言語学は、バベルの塔に象徴されるように、言語の多様性を罰のように考える傾向がある。第一、ラテン語から伊・仏・西のようなことばができることはすごいことなのである。それぞれ今あるような独特の文化をもった国ができ上っているのだから。日本唯一の学科と、優れた教授陣に頑張ってもらいたい。

総じて、今回は質疑応答のレベルの高さが目立った。懇親会は、JAF AEのプリンス、榎木菌氏の誕生日と愛子様ご生誕を兼ねて、大いに盛り上がった。

Bautista 教授特別講演

津田早苗 (東海学園大学)

講演は、フィリピンと日本の対比から始まった。フィリピンは貧しく、教育の普及率が低い。多言語国家である上に、スペイン支配後のアメリカ支配のため、第二言語として英語が使われている。このような言語背景をもつフィリピンは、異なる民族同士の関係 (民族語)、国家としての統一 (国語)、国際社会との関係 (英語) という互いに相反する言語問題を抱えている。憲法によって、フィリピン語が国家言語の地位を得ているが、英語も補助語としての機能を果している。このような概観をふまえ、フィリピンにおけるダイナミックな Taglish と Philippine English の使用の現状と、それに関する人々の評価について講演が展開された。

都市部の中・上流の教育のある人々は、インフォーマルな場面でタガログ語と英語のコードスイッチング (CS) をする。これを Taglish とよぶ。これは、片方の言語の能力が不足している場合におこる CS とは異なり、効果的にコミュニケーションをするための CS である。インタビュー記事を利用した Taglish の説明は、そのスピードとなめらかさから、フィリピンで Taglish が使われる様子が眼にうかぶようであった。

一方、フィリピンで第二言語として使われる英語はフィリピン独特の特徴を持つに至っている。これを Philippine English (PE) と呼ぶ。音韻的には、シラブル・タイミングであること、文法では、冠詞の誤用もあると聞き、日本人の英語との共通点を感じた。語彙には、スペイン語やタガログ語からの借用、フィリピン独特の造語がある。

PE に対するフィリピン人の評価について、レベルの高い大学では、PE により自信を持っているのに対し、一般の州立の大学では、アメリカ英語に対してある程度引け目を感じていることが調査結果に基づき説明された。結論として、Taglish は、状況に応じた英語と Tagalog の使い分けを可能にし、PE は、フィリピン人としてのアイデンティティーをあらわす

ために必要であると主張された。「フィリピンの民族的な特徴をもった英語について恥じる必要はなく、英語はフィリピン人のものであり、私たちが英語の主人になったのだ (We have colonized it, too.)」という結語には、フィリピンの複雑な言語問題に対するパウティスタ先生のプライドに満ちた姿勢が現れていると感銘を受けた。同時に、フィリピンの社会階層と英語との複雑な関わりを垣間見た講演でもあり、本学会の活動への大きな一歩を記した講演であった。

モンゴル言語文化事情

「ザー・パカ」から「ザー・パイ」へ

後藤田遊子 (北陸学院短期大学)

わたしが初めてモンゴルの地を踏んだのは1997年の夏でした。ある研究者のグループに同行したのです。首都ウランバートルにあるモンゴル国立大学や師範大学、そして官庁を訪れて、大学の教員や役人と交流する機会を持ったのですが、学者の多くが英語を解さないことに少々驚きました。しかし、よく考えてみると当然です。少し前の1990年に民主化を宣言するまで、この国には、英語の香りがまったくなく、ソ連の香りが充満していたわけですから。

社会主義時代のモンゴルでは、ロシア語を話すことがエリートの特権でした。その頃、といってもつい10年ほど前までのことですが、若者たちは、気取った相手に「はい (それじゃ) ・さよなら」と言うのにモンゴル語とロシア語をミックスして、「ザー・パカ」と言っていました。それが、民主化後、ロシア語が廃れ、英語が徐々にモンゴル社会に浸透するにつれ、若者たちはモンゴル語と英語がミックスされた、「ザー・パイ」を使いはじめました。特に、電話を切るときに「ザー・パイ」と言っているのがよく耳に入ります。日本語の「じゃーね、パイ」と似たような響きです。

70年間におよぶ旧ソ連との付き合いの中で、モンゴル社会に浸透したロシア語の数は想像以上のものがあると思います。この国では昔、日本のことをナラン (太陽が出る国) と呼んでいたそうですが、ロシア語で日本を意味するヤポンを取り入れ、ヤポンと言うようになったそうです。きっと、そのころはロシア人に習ってヤポンと呼ぶことがかっこよかったのでしょう。元のフビライ・ハーンに気に入られ、日本を「日いずる国」と呼ばせた、マルコ・ポーロに申し訳ないような気がします。この後、またナランという呼び名に戻るかどうか、あるいはジャパンと呼び始めたりするかなどは、モンゴル人のアイデンティティー問題と絡んでくると思いますが、興味のあるところでは。

モンゴルが旧ソ連とまったく関係が途絶えたかという、決してそんなことはありません。この国は、

その多くが輸入品に頼っています。特に、ロシア製、中国製の衣料品や食料品などの日用品は欠かせません。キャンディーやアイスクリームなどはロシア製が安いこともあって、よく売れているようです。私はアイスクリームが大好きで、モンゴル製とロシア製のアイスクリームを食べ比べてみました。コーン・アイスクリームは、どちらの製品も値段が安い (20円~30円くらい) ので、街中のキオスク (スタンド) で売られています。モンゴル製はあっさりした牛乳の味がします。ロシア製のアイスクリームは人工的な味つけがあって、最終的に、私は、モンゴル製で自家製のような素朴な味にはまってしまいました。是非、ウランバートルに行ったら、コーン・アイスクリームを食べてくださいとお勧めしたいのですが、日本人観光客は、包装されていないため、清潔さに欠けるせいか食べる人は少ないようです。アイスクリームがダメなら、是非ヨーグルトをお勧めします。酸味が強い自家製のヨーグルトもまた、はまる味です。素朴な乳製品の味わいは、牧畜民の伝統なのです。乳製品を味わってこそ、モンゴルを知ると言えるでしょう。

乳製品と言えば、モンゴルの遊牧民は、伝統的に、夏は白い食べ物、冬は赤い食べ物を食べて生活してきました。白い食べ物はチーズなどの乳製品です。ちなみに、赤い食べ物の代表選手は羊の肉です。夏はふんだんに搾乳をすることができるので、乳性品を主に食べるわけです。ミルクがあまり出ない冬は家畜を殺して肉を食べて厳しい冬をのりこえます。乳製品の醍醐味は、草原の家畜とともに移動する遊牧民のゲル (移動式住居) を訪問しなければ味わうことができません。なんといっても、遊牧民の女性たちは乳製品加工のプロなのです。彼女たちは、その日に搾乳したミルクを加工して、チーズ、クリーム、ヨーグルトからお酒まで作ります。モンゴルに来て、ウランバートルという都会にだけ滞在しているのはモンゴルのモンゴルらしさを本当に知ることはできませんが、草原に出かける余裕が無い場合は、せめて、おなかを壊すことを恐れず、素朴な味わいのアイスクリームやヨーグルトを食べて我慢をします。

今年の夏、ウランバートルに滞在中、モンゴルの英語事情に関する新聞記事が目につきました。今、モンゴルでよく使われる英語をユーモアと皮肉を交えて紹介していました。

通う先はオフィス
寝る部屋はデラックス
吸うタバコはケント
食べるのはケーキ
経営するのはホテル
音楽はポップ

飲む酒はウイスキー
怒る社長はボス
電話はファックス
待ち合わせ相手はミス
乗るのはジープ
大事なものはドル

好きな踊りはラップ 選んだ店はショップ

こうして英語がモンゴル社会に浸透していくのでしょうか？

しかしながら、大草原の海の中を移動する遊牧社会には、このような英語のことは意味をなしません。都会と遊牧社会では、生活様式がまったく異なるのです。

社会言語学エッセイ Jack K. Chambers 氏を囲んで

大原始子 (桃山学院大学)

社会言語学に関心を持つ者であれば、一度はどこかでその著書か論文に接したことがある Jack K. Chambers 氏が、今秋、来日された。氏は言語接触と言語変化が専門で、北米の up talk に関する報告で知られる。今回、日本言語学会、日本英語学会をはじめ、全国、合計 5ヶ所で講演会がおこなわれた。小規模ではあるが、私が所属する研究会 (変異理論研究会) に来られたときのお話をしたいと思う。

演題は 'Region and dialect' であった。

地域方言はどうもと敬遠する方もおられるだろうが、トロント近郊での使用語彙の分布を、3世代と5つの地域に分けて、実証的研究方法とデータを用いて明解に説明された。日本の方言研究より、アジアの英語の研究に大きなヒントを与える内容でもあった。日本やシンガポールは回りを海で囲まれているため、国境が言語の境界として認識される。そして、まだアジア英語の研究が始まったばかりということもあるが、どうかすると個別の言語政策に目を奪われ、英語の変種が国家単位で扱われてしまいがちである。国境が、必ずしも使用されている英語、場合によっては教育制度の境界になり得ず、これまでこのような状況を「辺境故の地域性」として説明してきたが、言語的に実証できるよい方法が見つけられないでいた。先生のお話を伺いながら、アジア英語のこれからの研究に応用できるかも、とあれこれ思いを巡らせた。

さて、本番は、講演の後である。奥様も交えて、阪急石橋駅前の学生街にある居酒屋で、懇親会をひらいた。多くの日本語研究者は、日常、英語をあまり使用しないが、先生を囲んでことばと研究に関する話が延々と続き、宴は盛り上がった。コミュニケーションが成立する条件の一つに、相互主体性 (intersubjectivity)、つまり参加者間の知識、体験の共有というのがある。異言語話者間では、使用言語 (主に英語) に対する知識の必要性が強調されがちであるが、現実世界に関する知識の共有 (この場合「Labov が～だって」という発話の意味の理解) がいかに重要であるかを知らされたひとときでもあった。Chambers 氏も、多くの社会言語学者がそうであるよ

うに「おしゃべり好き」であり、共に楽しい秋の夜を過ごしたことは言うまでもない。

フィリピン言語研究情報 フィリピンの古書店

河原俊昭 (金沢経済大学)

この数年、フィリピンに行くたびに、この国の言語政策の歴史に関する文献を集めている。新本ならば、ナショナルブックスストアやソリダリダッド書店へ行くが、古い本を探すならば、古本屋に行く必要がある。この国で、神田の古本屋街にあたるのは、キアポのレクト通りである。屋台に本を並べた本屋が路上に並んでいる。古本と言ってもほとんどが教科書のリサイクルである。フィリピンの大学生の多くが、新学期になれば、ここで、教科書を買って求める。ビニールのカバーが丁寧にかけられた中古の教科書が買い手を待って、屋台に並んでいる。

レクト通りでは、面白いことに、怠け者の学生のために、学期末レポートや卒業論文なども売っている。テーマや枚数を述べると、店の主人は適当な論文を探し出してくれる。金をはずめば、新しい論文の作成までしてくれる。しかし、そんな論文やレポートは、勘のいい先生ならば、たいていは見抜いてしまい、"Did you buy it at Recto?"と突き返されてしまう。

ところで、学術的な資料を集めようとしても、レクト通りでは見つかるのは教科書の古本ばかりで、いくら足を棒のように歩いても、成果はほとんどないだろう。日本では、神田の古書街をまる一日歩けば、たいていのテーマならば、100冊ぐらいは、すぐに買い集めることができるが、この点、フィリピンでは難しい。そんなことから、フィリピンでは、日本のような学術書専門の古本屋はないとあきらめている人がいるかもしれない。

そんな人には、クバオにあるヘリテージ書店を勧めたい。本店は3階ぐらいの小さなビルディングで、みしみしとしなる木の階段を上ってゆくと、床上や階段に、ぎっしりと積まれている古書、骨董品、油絵が見えてくる。たくさん積まれた古書を漁りながら、店内の至る所に置いてある古いマニラの風景画や民芸品を眺めるうちに数時間はあっという間に過ぎてしまう。ここは、美術館や骨董屋のような雰囲気も醸し出していて、フィリピンにはめずらしく枯淡を感じさせるお店である。なお、ヘリテージ書店は、シャングリプラザの6階と SM メガモールの4階に支店があるが、そこは本店とはうってかわって、現代風の華やかな雰囲気の中、古書、骨董品、絵画が並んでいる。

ヘリテージ書店は電子メールのサービスが充実している (heritage@iconn.com.ph)。登録しておくこと、

定期的に新刊カタログを電子メールで送ってくれる。カタログ全部に目を通すのは、かなり量があって大変なので、私はキーワード（たとえば、English、Tagalog、Language など）で検索して、関連する書名を見つけだして、注文をしている。自分の興味を持っている分野、探している本のタイトルを連絡しておく、入荷したときにはすぐに連絡をくれる。

今年の夏、この書店で、Lope K. Santos の *Balarila ng Wikang Pambansa* (国語文法) を見つけた。一万円以上したが迷わず購入した。表紙の裏には、持ち主のサインと「1940年6月10日購入」と記されていた。この本は私が長く探していたものである。その当時まで、タガログ語の文法書はスペイン語か英語で書かれていたが、はじめてタガログ語で書かれたタガログ語文法書であるという点で資料的な価値が高い。たとえて言うならば、漢字をいっさい使わずに「やまとことば」だけで現代の国語文法を記述したようなものだと考えてもらいたい。Santos のこの本の評判はさんざんだったが、フィリピンの言語政策史を研究する上で、欠かせない文献である。古風なタガログ語で書いてあり、フィリピン人でも難解とこぼすくらいだから、私に読めるのか大いに疑問だが、ただ眺めているだけでも結構楽しい。

ところで、この本の中に、一枚の手紙がはさんであった。おそらく持ち主の E.A. 博士がしおりとして使ったのであろう。内容は、授業中に不真面目な態度をとったことを謝罪する、ある女子学生から博士への手紙であった。読んでみると、ほのぼのとした師弟関係がうかがえて心暖まる。しかし、私たちは、あまり安易に手紙をしおりとして使わないほうがいいだろう。自分の没後、家人が本を一括して古本屋に売却して、ちょっと困る内容の私信が、何十年後に世に流出することもあるだろうから。

編集委員会から

① 紀要原稿の募集

『アジア英語研究』第4号への投稿は、論文と書評をあわせて11件ありました。これまでの最多投稿数で、質、量とも、年々着実に充実の方向に向かっております。お願いした査読者は33名となり、会員数の1割を超えています。この紙面をお借りして、査読者の方々に心からお礼申し上げます。現在、次回の大会前の出版を目指し、鋭意編集作業中です。

② モノグラフの販売

品切れとなっていましたモノグラフシリーズ第1号が増刷されました。1部500円で販売中です。第2号も1部600円で販売中です。モノグラフは売上の50%が学会の会計に繰り入れられますので、是非ご購入をお願い致します。お申し込みは事務局へお願い致します。

メーリングリストのお知らせ

昨年より、宮崎産業経営大学の徳地慎二会員にご協力をいただき、メーリングリスト（以下、ML）を始めております。しばらくの間、民間の無料MLを利用した「試行」とし、加入者は本学会会員のみとしております。

加入希望者は下記の手順でお申し込みください。

<加入方法>

加入希望者は、氏名、メールアドレス、所属を電子メールで榎木菌理事と徳地会員まで送ってください。加入は本学会会員に限ります。

<脱会方法>

脱会希望者は氏名、メールアドレスを電子メールで榎木菌理事および徳地会員に送って下さい。

<管理者のメールアドレス>

榎木菌理事：enokizono@akita-pu.ac.jp
徳地慎二会員：steve@hkg.odn.ne.jp

メーリングリストの趣旨

徳地慎二（宮崎産業経営大学）

榎木菌理事と一緒にメーリングリストの管理・運営している宮崎産業経営大学の徳地慎二です。ここでは、メーリングリストの趣旨について簡単にご説明いたします。

メーリングリストとは、電子メールを使って、特定のテーマについての情報を特定のユーザの間で交換するシステムです。具体的には、複数のユーザを1つのグループとしてメールサーバに登録し、情報を同時配信することにより実現することができます。

インターネット上には無数のMLが開設されており、グループの性格によって、広く参加者を募る公開型と、特定の集団の内部利用に限定された閉鎖型に大別されます。本メーリングリストへの参加条件は、日本「アジア英語」学会会員であれば、誰でも登録が可能です。

登録までの流れは次の通りです。まず、本メーリングリストに登録を希望する旨をメールにてお送りいただきます。管理者は、登録希望のメールに従ってメーリングリストへの登録を行います。そして、登録希望者は登録完了の通知（電子メールで通知いたします）を受け取ったら、自己紹介を兼ねた投稿をしていただきます。

本メーリングリストは、本学会理事長の本名信行先生の発案で始まりました。このメーリングリスト発足の趣旨は、多様化するアジア英語に関する情報を会員同士で共有することにより、日本アジア英語学会の発展に寄与することです。投稿内容はアジア英語に関するものであればどんな話題でも歓迎されています。今までのところ投稿内容として多いもの

は、アジア英語の現状の紹介やアジア英語を研究するのに有益な URL の紹介などです。

最後に本メーリングリストの現状と今後の展望について述べさせていただきます。現在抱えている問題点の中で深刻なことは先ず、投稿していただける会員の数が少ないことです。ほとんどが学会運営に当たっている理事者からのものです。もっと積極的な投稿が期待されます。本学会を発展させるためには、会員同士の数多くの情報交換が必要です。他の学会、例えば、日本認知科学会などはかなりの頻度で ML への投稿がおこなわれていますし、内容も多岐にわたっています。是非、投稿されたものを読むだけでなく積極的な意見の投稿をお願いいたします。投稿内容も、例えば、アジア英語の語法（例えば、通時的及び共時的な観点からのインド英語の表現方法の変化について）なども興味深いのではないかと思います。理想的な形としては、特定のテーマについて興味をもたれた会員の間で投稿が続いてゆき、活発な意見交換が行われることです。せつかくメーリングリストを立ち上げたのですから、より積極的かつ継続的な意見交換に繋がる話題の投稿をお願いします。ML への会員の皆様より積極的な加入と投稿をお待ちいたしております。

事務局から

①今後の国際交流について

学会では、第 7 回全国大会の特別講演者 (Dr. George Lang) の招聘、2000 年夏のインドへの研究旅行、そして今回、第 10 回大会の特別講演者 (Dr. Maria Lourdes S. Bautista) の招聘をおこなってきました。2001 年夏のインドネシアへの研究旅行は政治的不安定という理由でキャンセルしました。2002 年夏の研究旅行も今後の世界情勢を考えて決めたいと思っています。決まり次第、会員のみなさまにはお知らせいたします。

②次大会について

第 11 回全国大会は 6 月 29 日 (土) に東京の白百合女子大学で、また第 12 回大会は 11 月 30 日 (土) に奈良の天理大学で行う予定です。

③名誉会員について

11 月 30 日の理事会にて、インドネシアの Euginius Sadtono 氏と第 10 回全国大会特別講演者のフィリピンの Maria Lourdes S. Bautista 氏が推薦され、名誉会員と認められました。また海外会員としてインドの CIEFL (Central Institute of English and Foreign Languages, Hyderabad) 大学院生 Deepshikha Mahanta さんが推薦され、認められました。

④理事選挙について

2002 年 3 月 31 日で現理事の任期が満了しますので、理事選挙を行います。同封の選挙関係の書類をご覧ください。

第11回全国大会研究発表者募集

第10回全国大会 (2002年6月29日 (土)、於白百合女子大学) で研究発表を希望される方 (会員に限る) は、要旨 (日・英どちらか) を A4 用紙 1 枚にまとめて、5 月 7 日 (火) 必着で、電子メール、FAX または郵送にて、事務局 (奥付参照) までお送り下さい。

CALL FOR PAPERS for the 11th

National Conference on June 29,

2002 at Shirayuri College in Tokyo

The Conference Committee invites submission of abstracts for papers. Submission is by e-mail, fax or mail. Abstracts for papers should be no more than 250 words in length. The deadline is Tuesday, May 7, 2002. Please send it to the JAF AE Secretariat (address below).

（ 会 員 消 息 ）

次の方々は連絡先が分からなくなっています。至急事務局にご連絡ください。

- * 木下恵理子
 - * 田中和彦
 - * 長谷川由美
 - * 守誠
- (敬称略)

<編集後記>

先日、雪に埋もれた秋田を脱出し、千葉のアジア経済研究所の図書館を利用しました。アジア各国の資料の多さにただ圧倒されました。研究員だけでなく図書館員も語学研修だけでなく 2 年の海外研修にも派遣され、担当地域の専門性を高めているそうです。

今回は、原稿をたくさんいただくことができ、非常に内容が充実した号になりました。今後も、紙面の許す限り掲載していきますので、エッセイ、アジア情報、書評など、どんどん投稿してください。

2002 年 1 月 31 日発行

編集・発行 日本「アジア英語」学会

代表者 本名信行

編集長 榎木磨鉄也

発行 (有) タナカ企画

事務局 〒182-8525 東京都調布市緑ヶ丘 1-25

白百合女子大学 田嶋宏子研究室内

FAX: 03-3326-4550 E-mail: tina2@gol.com

学会ホームページ: <http://www1.linkclub.or.jp/~jafae>

年会費振込先: 郵便振替 00280-8-3239

<< JAF AE Secretariat >>

Professor Hiroko Tina Tajima

Department of English, Shirayuri College

1-25 Midorigaoka, Chofu-shi, Tokyo 182-8525 JAPAN

FAX: 03-3326-4550 E-mail: tina2@gol.com

JAF AE's homepage: <http://www1.linkclub.or.jp/~jafae>

JAF AE's postal transfer account number:

00280-8-3239